

京都御所の築地跡

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 現在の京都御所 南面築地(南東から)

はじめに 京都御所は土で造られた立派な塀に囲まれています。このような土塀を築地と呼んでいます。御所の築地は5本の白い横筋を壁に入れて石積基壇の上に築かれており、その姿は御所の威厳と風格をそなえています(写真1)。

1999年3月、春の一般公開を目前にして御所内の東南隅で、参観者用便所の整備工事にともない発掘調査を実施したところ、江戸時代中期の寛政年間に造営された「寛政度内裏」の築地跡をはじめ、当時から現在に至る京都御所の移り変わりをたどれる一連の遺構が見つかりました。

京都御所の歴史 平安宮の内裏は天徳四年(960)に炎上しましたが、その後も焼失と再建がたび重なりました。その際、一時的な仮の皇居に貴族の邸宅があてられ、里内裏と呼ばれていました。

現在の京都御所は、鎌倉時代か

ら室町時代にかけて、里内裏の土御門東洞院殿を皇居としたのがその始まりです。平安宮内裏の東約1.6に位置し、現在、紫宸殿や清涼殿が置かれているあたりにありました。

室町時代には火災や地震で崩壊した内裏を足利義満と義政が応永度、康正度に再建し、その後、戦国時代に荒廃しましたが、織田信長が修造し、桃山時代には豊臣秀

吉が天正度に再造営しました。

江戸時代には徳川家康の慶長度造営の際に著しく規模が増大し、寛永度には小堀遠州のもと、本格的な造営がなされましたが、火災も多く、承応・寛文・延宝・宝永・寛政・安政度とあわせて8回に及ぶ再建が繰り返されました。

現在の御所は慶応元年(1865)に今の規模となり、おもな殿舎は安政度内裏のものです。

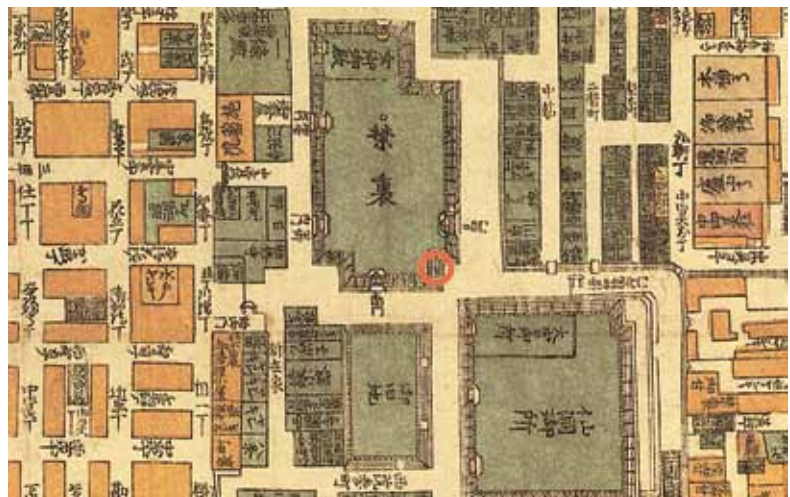


図1 寛政度内裏の洛中絵図 中央の丸印が今回の調査位置
改正京町絵図細見大成 天保二年(1831)『慶長昭和京都地図集成』柏書房より一部改編



写真2 調査区の全景 道路・柵列・築地跡(西から)



写真3 寛政度内裏の築地跡(北西から)

発見遺構 今回のおもな発見遺構である寛政度内裏の築地跡を、より理解しやすいように古い時期の遺構から順に紹介していきます。

道路跡 内裏の前面道路と想定され、深さ約1.4mで発見しました。道路跡は固い面が何枚も重なっており、その中間面と最上面には焼土が薄く広がっていました。これらは宝永五年(1708)と天明八年(1788)の大火による焼土と推定できます(写真2)。

仮設の柵列跡 小型の柱穴が東西方向に並ぶ柱列の遺構で、道路の面で発見しました。宝永度内裏の史料によると、天皇が退位して仙洞御所に移る際に、警護を目的として埒という背の低い柵列を道路内で通路状に仮設したとあり、今回の遺構はその北側部分と判別しました(写真2)。

内裏の築地跡 天明の大火後、寛政二年(1790)に完成した寛政度の造営では、敷地の南北が拡大

されましたが、南側は東西にある女院御所と公家屋敷に接するため、中央部だけが凸型に約25m拡張されたことがわかっています(図1)。

今回発見した遺構は、2列一組の石組が幅約3.0mで南北方向に配置された遺構で、最下段しか残っていませんでした。石材は60～90cm大の花崗岩の切石でしたが、外側の東西面だけは表面を加工して化粧仕上げを施してありました。

この石組遺構は、築地の石積基礎の基礎石と推定され、出土遺物や内裏の絵図などから、寛政度の造営の際、拡張部の東面に築かれた南北築地に相当します(写真3・図2)。

また、拡張部は1mほど土を盛り上げて造られ、寛政度の造営時に内裏の敷地面が、ほぼ現在の高さまで造成されたことがわかりました(図2)。

おわりに 江戸時代の内裏の変遷がどのようであったか、これま



図2 寛政度内裏築地の推定断面図

で絵図などでしかわからなかったのですが、一部ながら発見遺構を通じて具体的に解明できました。

この寛政度内裏の築地跡は、宮内庁京都事務所の協力を得て、発見状態のまま埋め戻されて保存されています。

これらは考古学や歴史学において、京都御所の沿革史を研究する上で貴重な成果であり、近世内裏の最初の遺構として今後の重要な史料になると思われます。

(長戸 満男)